

## 朗 読 文

国電のガード下に、幾つかの店舗が並んでいた。作業衣ばかりを専門に卸している商店とか、自動車の中古部品を売る店とか、不動産の周旋屋とかに混じって「フレンド」という理髪店があった。私のいる部屋の窓から、店先に出された赤と白のねじり棒と、「フレンド」と書かれた小さな看板が見える。部屋から見えるのは、高架を走っていく電車と高架下の何軒かの店舗、それにその前の公園だけである。公園にはそれほど大きくもないくすの木が、夕暮時になると西陽を受けて長い影を伸ばしていく。大阪の中心を大きく循環する国電の沿線にあるごみごみした街で、子供たちの声と自転車のブレーキ音が間断なく聞こえてくる。

電車が通るたびに、公園をへだてた私の部屋にまでその振動が伝わってきたから、高架下の店舗は、さぞや強烈な轟音に包まれているだろうとよく思った。すると、まだ一度も行ったことのない「フレンド」の内部の様子が自然に心に浮かんでくる。商気のない無精ひげの主人がひとり暇そうに新聞を読んでいて、理容椅子が二台、狭い店内に置かれている。週刊誌や漫画の本が積み上げられ、アルミの灰皿と徳用マツチの箱が待合用のテーブルの上にある。電車がやってくると、店内に置かれているシヤンプーの容器やヘアトニックの壇や櫛やハサミが、小刻みに震え始める。落ちてくる髪の毛までが踊りだして、床の上で集まったり散ったりしている。五分後に反対方向からまた電車がやってくる。ラッシュ時にもなると、二分おきに店内全体が揺れ動いて、主人は客の顔の上にカミソリを置いておくだけで、振動によって自動的に剃り上がってしまうほどである。だから恐ろしくて誰も二度と行かなくなってしまう。もっと商売熱心の、清潔で静かな理髪店が、街にはたくさんあるからだった。

窓から眺める景色の中にもたまたま電車が通り過ぎたりすると、「フレンド」の店内で顔を剃ってもらっている自分の姿を想像して、首筋や顎のあたりにかすかな泡が生じるのを感じながら、室内のあちこちに目をそらす。最終電車のスパークが暗がりの中を青く走っていく頃、突然「フレンド」の店内に灯りがともる時がある。私はいつもそのくらしい時間にトイレへ行き、部屋の鍵をかけて窓のカーテンを閉め、蒲団にもぐり込むのだが、横たわったまま二、三度大きく伸びをして、眠るために目を閉じていても、「フレンド」の灯りが何だか気になって神経が冴えてくる。

夜中の一時近くに、誰かの頭を刈っているのだろうかと考えて、起き上がってカーテンの隙間から覗くと、人の気配のないまま、灯りだけが高架の下でしんと静まりかえっているのだった。灯りは夜明け近くまでともったままの時が多く、私がうとうと眠って再び目を覚ます頃には消えているのだった。